広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Havelok the Dane における þ と th
Author(s)	今井, 光規
Citation	ニダバ , 14 : 21 - 25
Issue Date	1985-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047162
Right	
Relation	

論　　文

Havelok the Daneにおける Þ と th

今　井　光　規

中英語韻文ロマンス *Havelok the Dane* (1280－1300年頃の作)[1]の写本は，オックスフォード大学ボドリーアン図書館所蔵の MS. Laud Misc. 108 (ff. 204r － 219r) がほぼ完全な形で現存する唯一のものである。それに対して，これまでに刊行されたテクストは，重要な改訂版や抜粋，写本の転写などを含めると30種以上もあり，つい最近も T. J. Garbáty: *Medieval English Literature* (D. C. Heath & Company, 1984) 所収のテクストが新しく出版されたばかりである。これらの版本の中には，厳密な編纂方針を掲げて，直接写本(又は写本の写真)を照合し，文字一つに至るまで写本との異同を正確に示そうとしているものが多い。　しかし実際には，そのような版本によっては判断のつかない問題もある。たとえば，ルーン文字の þ (thorn) と二重音字 (digraph) の th は，大半の版本に用いられているが，それらの文字の使用は，はたして元の写本ではどうなっているのだろうか，といったきわめて初歩的で基礎的なことがそれらの版本からは結局わからない。それらの文字の使い方は版本によってまちまちであり，それらの版本の編者たちの記述にも合致しない点があるからである。先年機会を得ることができたので，私は直接写本に当ってこの点を調査し，その一部をすでに報告した。[2]その報告では，1828年の Frederick Madden: *The Ancient English Romance of Havelok the Dane* (London) から最新の Garbáty にいたる約150年間に刊行された32のテクストについて，それらの編者たちが þ と th (ただし語頭に現われるもののみについて) をどのように使用し，又記述しているか，実情を調べ，それを私自身の写本調査の結果と比較した。最も重要な点を紹介すれば次の通りである。

(1)直接写本に当り，さらに写真を用いた調査で私が認めることのできた語頭の th は次の12例 (6 語) のみである。[3]

> theues (*l.* 41), thousande, thusand (*ll.* 127, 2355, 2360, 2371), thaue (*l.* 296), thow(*l.* 1669), thes (*l.* 1903), thayn, theynes, thaynes, thein (*ll.* 2184, 2194, 2260, 2466) [行数は Skeat, EETS 版による。]

(2)調査した32のテクストで þ を用いているもの (6 つのテクストは þ を用いていない) のうち，上記(1)の結果に合うものは J. A. Bennett & G. V. Smithers: *Early Middle English Verse and Prose* (Oxford, 1966) 所収の約400行の抜粋と W. W. Skeat: *Twelve Facsimiles of Old English Manuscripts with Tran-*

scriptions (Oxford, 1892)所収のファクシミリに添えられたわずか90行の転写の2つだけで，それ以外の版はすべて誤りを含んでいる。

(3)転記の誤りは，少ないもので(抜粋における)数個から，多いもので95個所以上(Skeat, EETS版)といった具合に，版本により異るが，テクストの行数では3001行中の99行にわたって見られる。行ごとに見れば，誤りがSkeat (1868年のEETS版)に始まるものがその99行中94行，Skeatのみで終るものはわずか2行だけであり，ほとんどの行において，数種の版本(SkeatやMaddenのテクストをそのまま採ったものだけでなく，直接写本に基づいて編纂されたものにも)に誤りが踏襲されている。以上が調査結果の主要点である。

*Havelok*は，内容的にも語学的にも，MEの見本として教室でとり上げられることの多い作品の一つであるが，専門的な古文書学研究の場合は別として，ふだんの教室では語形や綴字に関する情報は，版本とその編者たちの記述に頼ることが多い。そのことを考えると，上記のような誤りの影響は無視できない。特に，つい最近まで最新版の座にあり，150年に及ぶ*Havelok*研究の集積と考えられるA. V. C. Schmidt & N. Jacobs: *Medieval English Romances*, 1 (London, 1980)に60個所以上の誤りが踏襲され，数個の新しい誤りがつけ加えられていることは，その版がしばしば写本の細部について綿密な注を施しているだけに具合が悪い。

このような夥しい転記の誤りを引き起こした原因を軽々しく断定することはできないが，一つには，現代綴りによって最初の版本を作ったMaddenとそれに続くSkeatのあまりにも大きな権威をあげることができようが，多くの編者たちの間に，正確さを求める一方で，音価の等しいこれらの綴字の異同を恐らく意識的・無意識的に軽視する傾向があったことも見逃すことはできないであろう。この傾向は，この問題を十分意識していながら，「意味にはめったに関係がない」[4]という理由で，これらの文字を必ずしも厳密に扱わなかったSisamの態度に典型的に見られるが，thの誤りを熱心に訂正したHolthausenにも窺うことができるであろう。彼は，彼の版本の第2版の段階で，直接写本に接した時，自分の版の「これらの誤りは純粋に正字法上のもので，有難いことに意味はまったく変らない！」と述べている。[5]

けれども，厳密な編纂方針に矛盾するこのような中途半端な実践は，編者たち自ら版本の利用価値を狭めてしまうものではなかろうか。それらの版本が文字の使い方に関する誤った情報を与える害はすでに述べたが，ここで問題にしてみたいことは，それらの版本がこれらの文字の使い方を音の等価や意味とは別の次元で自由に「空想」してみる基盤を読者から奪ってしまうということである。たとえば，*Havelok*の写本を実際に使った人物の「一つの」立場を空想してみることにしよう。すると，Skeatが誤記した沢山のthのうち，行頭の語の語頭に現われるもの10数個が，もし本当に写本にあったなら，中世のミンストレルは多少の不便を感じたにちがいないと思えてくる。

*Havelok*の写本では，各段落の第1行と第2行を除くすべての行の最初の1字が，行の残りの部分から少し(1～2字分)切り離して書かれている。(第1行目の最初の1字は特別の大きな飾り文字

であり，第2行目の始まりは，その飾り文字に妨げられて数字分だけ右に寄り，かつ行頭の1字は第3行目以下におけるようには切り離されていない。[6] したがって，写本ではおよそ次のような文字の配置になっている。

B ute þou swiþe eþen gonge
G rim þoucte to late þat he ran
Fro þat traytour þa wicke man
A nd þoucte wat shal me to rede
W ite he him onliue he wile beþe
H eye hangen on galwe tre
B etere us if of londe to fle

版本の編者たちの何人かは，写本のこのような様式を詳しく記述しているが，その理由を説明している編者は見当らない。第1行目の大きな飾り文字に装飾の要素を否定することはもちろんできないが，それが段落の見出しという実用的な役目を果たしていることも間違いないだろう。同様に，第3行目以下の行頭の切り離して書かれた1字に装飾の要素を否定することはできないであろうが，私がそこに仮定してみたいと思うものは，大きな飾り文字の場合と類似の実用的な機能である。いま，ミンストレルが聴衆を前にして，この写本を使いながら物語を始めたとする。[7] 彼は物語をほとんど完璧に暗記していて，手許の写本には，自分が行を正しくこなしているかどうかを確認するために，時おり目をやる程度である。時には次の行をど忘れすることもあり，そんな時にもちらりと見る。行がどんな音で始まるかを知りさえすれば，後はすらすら口をついて出る。つまり，行頭の1字は単なる装飾や形式のためだけではなく，記憶を確かめたり呼び戻したりする鍵の役目を果たし得たと考えてみるわけである。もしそうだとすると，その1字がþであるかtであるかは，かなりの違いになる。þであれば，瞬間的にその音を知り，行全体を思い出すことができようが，tならば，心理的にははるかに離れた第2字を探し，それを読み終えなければ音価を決めることができない。要するに，thの音をthの綴りで表わすのは，ここで仮定したような口誦の脈絡においては，写本の様式ゆえに非能率的であり，瞬間的な記憶の見出しとしては役立たないのである。この意味では，脚韻や時おり使用されている行中の頭韻など，記憶を助ける他のすぐれた工夫も効力は劣ることになる。

さて次に，特定の写本についての以上の仮定を証明する資料としてではなく，[8] 空想をさらに飛躍させる材料として，同じく中英語韻文ロマンスの中から，三つの写本で伝わっている *Sir Orfeo* に触れておきたい。*Sir Orfeo* の最も古い The Auchinleck MS. (Advocates 19. 2. 1) (1330年頃) は，*Havelok* の写本と同じく，行頭の1字を離して書く様式をとっている。第2の MS. Harley 3810 (15世紀初め) と最も新しい MS. Ashmole 61 (Bodleian 6922) (1448年以後) においては，行頭の1字に特別の扱いはされておらず，行頭の語は常に一かたまりに書かれている。Auchinleck 写本には th

で始まる語は見当らないが，他の二つの写本にはそれが見受けられる。すなわち，Harley 写本では，ごく少数ながらも th が現われ，それが行頭の語，行中の語いずれの語頭にも用いられている。それに対して Ashmole 写本では，行頭以外の語頭では，þ と th の両方がかなり自由に用いられているが，行頭では常に th だけが用いられている。

この場合，それぞれの写本が生れるに至った経路や年代，方言の違い，写本が作られた目的，写字生の特性等を考慮しなければ，これらの写本について何一つ信頼できる結論を引き出すことはできないであろう。けれども，特に Ashmole 写本の場合，行頭以外の語頭では þ と th の両方が自由に使用されているのだから，行頭の th を，þ の衰退の大まかな歴史[9]との符合で片づけることができないことだけは確かである。だからといって，そのことを上述の瞬間的な記憶の鍵の線に直結させるのは，明らかに短絡である。いま私に漠然と言えることは，少なくとも文字の使い方の正確な観察から出発したこの種の空想は，写本の様式(その様式の起源や機能，さらにはその機能の変化等々)の精密な研究に何かの刺激を与え，逆にそのような研究のもたらす成果に正しく支えられれば，ある種の中英語ロマンスを口誦の脈絡に戻してその本来の姿を捉えようとする試みにいくらか貢献できる可能性をもち得るのではなかろうかということだけである。

[以上は，筆者がコペンハーゲン大学に滞在中，同大学英文科の Arne Zettersten 教授から *Havelok* の写本を見ておくようおすすめいただき，同教授ならびに，ME ロマンスを一緒に読んで下さった他の先生方に写本見学の印象を報告した時(1983年 3 月)に作成した資料の一部に加筆したものである。Zettersten 教授はこのような「空想」に大きな関心をお示し下さり，その場でいくつか助言もいただいたが，この方面に疎い筆者は今なおこの問題に手をつけることができない状態である。そこで，とりあえずこのような形のノートにしておく。]

注

1) J. B. Severs: *A Manual of the Writings in Middle English* (New Haven, Connecticut, 1967), II, 22.

2) 「*Havelok the Dane*: 写本と版本」，『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要Ⅴ)，9 (1983)，103－23.

3) 他に thit (*l.* 2990) がある。Skeat, EETS 版索引参照。

4) K. Sisam: *The Lay of Havelok the Dane* (Oxford, 1915), p. vi. 彼は他の編者の誤りをわざわざ指摘しておきながら，自らの版ではその同じ個所の誤りを Skeat から踏襲している。上掲拙論 p. 15参照。

5) F. Holthausen: *Havelok* (Heidelberg, 1910), p. vi. なお，ここまでは上掲拙論のあらましである。

6) ここに記述した写本の体裁には，若干の例外がある。

7) 中世のミンストレルが ME ロマンスをどのように 'perform' したかは推測の域を出ない。楽器を

使ったかどうか，使ったとすればどのように使ったかもはっきりとは分っていない。ミンストレルが楽器で伴奏しながら「歌った」場合，片手に本を持ち他方の手に楽器を持つのは無理だから，その場合は物語を諳んじたのであろう (A. C. Baugh, 'The Middle English Romance', *Speculum*, 42 (1967), 21) が，*Havelok* の写本がミンストレルか誰かによって，楽器なしで，半ば暗唱半ば音読された可能性を完全に否定してしまうこともむづかしいと思われる。われわれの空想はそのようなわずかな可能性の上に成り立つ。なお，Karl Brunner は *Havelok* の現存写本がミンストレルによって携帯された可能性を論じている ('Middle English Metrical Romance and Their Audience', *Studies in Medieval Literature in Honor of Prof. A. C. Baugh*, 1961, p. 223)。これらの問題については他に Ruth Crosby, 'Oral Delivery in the Middle Ages', *Speculum*, 11 (1936), 88 − 110，および H. J. Chaytor: *From Script to Print* (Cambridge, 1945) なども有益。

8) このような仮定が単純に一般化できないことは，行頭に th を用い，しかも *Havelok* の写本のように1字を離して書いた写本が存在することからも明らかである。

9) たとえば，'... towards 1400, þ gradually went out of use and **th** was normally written in its place.' (Fernand Mossé (tr. J. A. Walker): *A Handbook of Middle English* (Baltimore, 1952), p. 8)